

二人の息子のたとえ

聖書 マタイによる福音書 21 章 28～32 節 讃美歌 430 433

説教 森田幸男牧師

前回私たちは今日の箇所のおすぐ前の 21 章 23 節以下のところを読みました。そして今日の箇所へと来るのですが、この前の“権威についての問答”というところを読んだ時に、「聖書を読むことは怖いことです」と申しました。何故なら、聖書を読むことによって、「あなたは何を究極の拠りどころとしているのですか」ということが問われるからであります。先週 6 月 6 日の聖日礼拝の時に、私たちが聖書を読むということは何に例えたらよいただろうかと申して、「それは、死んだ人間が再生復活する蘇生の外科的大手術の場に居合わせるようなものだ」と、そのように例えました。この聖書を読むということについては、その他いろいろに例えることができると思うのですが、いずれにせよ聖書を読むということは、これは真剣勝負であります。食うか食われるか、命がかかっているのであります。つまり、私たちが聖書を読む時には、それはいろんな読み方があるでしょうけれども、聖書によって私たちは神様に対する態度表明が問われることになるからであります。

さて、今日の箇所には“二人の息子のたとえ”という題がついております。今日の箇所には実際の登場人物と、たとえの中の登場人物があります。実際の場面での登場人物は、それは 28 節に、「ところで、あなたたちはどう思うか」とキリストはこのようにおっしゃいます。「あなたたち」というのはこれまでの流れから明らかなように、祭司長たち、律法学者たち、民の長老たちということで、これはイスラエルの最高の指導者たちを指すわけです。これは前回、「あのバプテスマのヨハネは神から遣わされた人か。それとも単なる人間的な人か」とイエス様が祭司長、律法学者、民の長老たちに問うた時に、彼らは「分かりません」と言って答えを濁したのであります。「それなら、何の権威によってこのような言動をするのか、わたしも言うまい」と言うところで前の箇所は終わっているのであります。そういう次第で、今日のところでイエス様が、「あなたたちは」と言われるのは、明瞭に答えをしないで逃げたところの祭司長、律法学者、民の長老たちであります。

そしてたとえの方の登場人物というのは、父親と二人の息子であります。たとえの中の兄は、父親が「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」と言ったら、兄は「いやです」と答えたのですが、後で考え直して出かけた、とこのようにあるのですけれども、この兄は、その後に出てくる徴税人や娼婦たちと言われている人たちの例えで、この人たちは祭

司長や律法学者、長老たち、或いは真面目な信仰者たちからは、神の国から一番遠い、神の国に入ることができない、神の祝福を受けることのできない罪深い者たちだというふうに言われていた人たちであります。それに対して、父親は弟の方にも同じことを言いますと、弟は、「お父さん、承知しました」と、とてもいい返事をいたしましたけれども、彼は出かけて行って働かなかったのです。こういうたとえをイエス様はなさって、「この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか」と聞きますと、彼らは「兄の方です」と答えただけであります。この問いに答えるのに何の躊躇もなく、最初「いやです」と言ったけれども、あとで思い直して出かけて行って働いた兄の方が、父親の望みどおりにしたと、正に正しい答えをするわけであります。

このいきさつを見ておきますと、祭司長たちはたとえについては何ら躊躇することなくはっきりと答えますし、正解もできるのであります。しかしこれは小学生でも正解すると思うのですね。ところが前の権威についての問答ということになりますと、彼らの答えははっきりしていたわけです。“ヨハネも、そしてお前も、神から遣わされた本当の預言者ではない”というのが本当の腹にある答えですが、そう言うと、民衆はヨハネやイエス様を支持しているわけですから、その民衆を敵にまわすのが恐ろしいということで、彼らは「分かりません」と言って答えるのを避けたのであります。このように自分自身の利害がからんでくると、俄然その問いに対して Yes, No, というのは難しく重いことになってくるのですが、彼らはこのように、たとえについては、「兄の方です」と正解を出したわけです。

するとイエス様は言われます。「はっきりしておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。彼らはヨハネを受け入れなかったのですけれども、しかしよく考えて、徴税人や娼婦たちでさえもヨハネを受け入れて、義の道に従ったわけですから、本当ならばもっとよく神様の教えが分かっているあなたたちはそれを見て、考え直してヨハネを信じ、そして神の教えに従うべきではなかったか。このようにイエス様はおっしゃったのであります。この指導者たちは、徴税人や娼婦たちを罪人と同じように見ていたわけですが、その人たちがあなたたちより先に神の国に入る。神の祝福を受けるとおっしゃったわけであります。

このような次第で、見た目とか外観とか言葉の上とか、或いはたとえとの理解の点では正しくても、実際上は、これは既に右の頁で「神殿から商人を追い出す」というところで読んだことですが、祭司長や律法学者や長老たちというのは、「PASSION」を觀られた方はお分かりのように、立派な服装をしているわけです。けれどもイエス様は、そんな外面的なことでは騙されない。「あなたがたのやっていることは強盗と同じだ」とおっしゃって、言葉の上ではきれいかもしれない、見かけ上は宗教的かもしれないけれども、それは丁度

この弟の「お父さん、承知しました」と、返事は丁寧で立派だけれども、実際は父の求めに応じなかったその行動と同じで、そればかりか、あなたがたの礼拝も祈りも、そして人を指導するなどということも見掛け倒しで、その中身は強盗と同じだということをイエス様はおっしゃったのであります。祭司長たちもこういう言葉を受け入れることはできません。これが他の人に対して言われたことなら、「それは尤もだ」となるのですが、「強盗はあなたなのだ」とイエス様に言われると、そんな言葉を受け入れることはできないのです。

さて、私たちは今日の箇所、そして前回、前々回と読んできた箇所を振り返りながら、問題は、今日のたとえに出てくる兄のことでも弟のことでも、また、祭司長や律法学者や長老たちや、そして徴税人や娼婦たちのことでもない。私たちはここを読みました。それはある意味では他人事ですね。それは読んでそれなりによく分かるのです。これは私たちにとって、ある意味ではたとえであり例話であります。しかしこの聖書は私たちに、「それではあなたは神の前に如何に生きていますか」ということを問うてくるのであります。そして神の求めは、「はい、承知しました」と答えて、出かけて行って働くことなのです。

私たちも今聖書をこのように読んでおりますけれども、このようにたとえを読み、また他の人たちの例についてその問題性を判断する点では、私たちは第三者的に、取りあえずは読むわけです。他の人のことを見ているその時には、私たちはそれなりに的確に判断できます。しかし、自分自身の利害がからみ、非難が自分に向けられると、その途端に私たちの思考は停止してしまふ。判断がにぶってしまふ。この強盗だと言われている人たち、そして「はい」と返事はしたけれど、出かけて行かなかった人は、あなたのことですよ。聖書はそのように私たちに語っているのです。それをそのように受け止めて聞くというのが、「聖書を読む」ということだと思ふのです。

今日ご出席の方は、「PASSION」という映画を観られた方の方が多いと思いますが、あの映画を観て、あのイエス・キリストの受難の姿というのはそれなりに私たちに迫るものがあると思います。“かくも苦しみを受けられたのか”と、そのように思います。また、そのような中であっても、キリストの限りない赦しの態度には感動も覚え、尊敬もし、畏敬を私たちは覚えると思います。でもそれもまた傍観者的というか、第三者的な見方だと思います。正にそのキリストが、映画から抜け出して、聖書から抜け出して、私たちに「わたしに従って来なさい」と言われるわけでありまして。この「わたしに従って来なさい」というのは、「わたしと同じ道を歩みなさい」ということなのです。「自分の十字架を負ってわたしに従って来なさい」ということです。ところが、多くの場合、この最後のところの手前までは私たちはそれなりに聞いているのですが、「自分の十字架を負ってわたしに従って来なさい」というこの部分になると、私たちはこれを「たとえのように」聞いているのではないのでしょうか。わたしには関係ない。そうは言葉に出しては言わないのですけれども、それはまるでたとえのように、他の人に言われているようにこの言葉を聞いて、結局は聞

き流して、「はい、お父さん、承知しました」と一応表立って言うかもしれませんが、実際は自分の利害に関わるどころではなく、命に関わるから、それに従うことはできないと判断して、旧来の行き方を続ける。それが私たちの実際ではないのでしょうか。そこにキリスト教の、また教会の、私たちの信仰の軽さと無力さがあるのではないのでしょうか。

求められているのは、キリストを信じることはばかりではなくて、信じるが故にキリストの求めに従うこと。それを併せて「信従(しんじゅう)」と言いますが、聖書で言う「信仰」というのは「信従」なんです。信じるけれども、その人の言うことには従わないというのは、これは信じたことにならないのです。本当に信頼し信じているならば、その人の言うことには当然従うのです。そうではないのでしょうか。けれども私たちはキリストに対しては、繰り返しての過ちにも拘らず、本当に限りない赦しをもって接してくださるそのことに感謝はするのですが、キリストの求めには一向に従わない。これはキリストを信じているとか信頼しているとかいうのではなくて、言葉は汚いですが、キリストをなめているわけです。それでいて神の祝福にあずかり得るなどというのは、そんなうまい話はどこへ行ってもないし、そんなことは通じないと思うんですね。しかしそれが私たちの実際ではないのでしょうか。信じる人は従うのです。従う人が信じているのです。信仰とはキリストへの信従なのです。

もう少ししたら読むことになる先の箇所を最後に読んで終りにしたいと思います。まだ祭司長、ファリサイ派の人々とのやり取りは、ずっと25章まで続いているのですが、マタイによる福音書22章34節～40節を読みます。

「ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集った。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。『先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。』イエスは言われた。『<心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。>これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。<隣人を自分のように愛しなさい。>律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。』」

お祈りいたします。

憐れみ深い、聖なる主イエス・キリストの父なる神様。

どうか私たちが聖書を通して語られるあなたの御言葉、イエス・キリストの御言葉を真剣に受け止めて、自分に対するあなたの求めとしてこれを受け止めて歩む者とさせてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン